

環境音の種類と聴取頻度に基づく音環境の意味論的記述手法に関する研究

日本建築学会環境系論文集 第75巻 第657号/pp.937-944/2010年11月

正会員 平栗 靖浩 君

従来の音環境の評価は、A 特性音圧レベルや NC 値などの量的アプローチに基づき行われてきたが、快適性評価のためには音環境を意味論的に把握する手法の深化が必要である。

本論文は、音環境の意味論的記述手法として可聴時間率を定義し、環境音の聴取頻度を量的に記述する新しい手法を提案している。また、多段階グループ編成手法や階層型クラスター分析手法などを用いて、多様な環境音を客観的に類型化する手法を提案している。この提案に際し、数時間を要する実験を多数の被験者に実施するなど、卓越した努力がみられる。さらに、店舗空間、アーケード街路、都市空間において多数の調査を丹念に行い、類型ごとの可聴時間率によって音環境の記述が可能であることを検証している。

今後、実際の音環境の評価にどのように結び付けていくかは課題であるが、サウンドスケープの観点からの音環境の記述にも応用できるなど国際性も豊かで、将来の発展が期待できる。